

「ひとりの人が民の代わりに死ぬ」

(士師記11章29節～40節)

「エフタは【主】に誓願を立てて言った。『もしあなたが確かにアンモン人を私の手に与えてくださるなら、私がアンモン人のところから無事に帰って来たとき、私の家の戸口から私を迎えて来る者を【主】のものといたします。私はその人を全焼のささげ物として献げます。』」(11:30, 31)

(ヨハネの福音書11章45節～50節)

「しかし、彼らのうちの一人で、その年の大祭司であったカヤパが、彼らに言った。『あなたがたは何も分かっていない。一人の人が民に代わって死んで、国民全体が滅びないですむほうが、自分たちにとって得策だということを、考えてもいい。』」(11:49, 50)

今日のメッセージ要旨

◎家族及び諸集団の中でひとりの存在がどんなに尊いことでしょう。しかし、その人が死ななければならぬと分かった時、どの様な態度を取るでしょうか？

◎士師記11章29～40節は「さばきつかさの活躍」(3:7～16:31)の一部分、8人目「エフタ」(10:6～12:7)の記事の一部です。11章は「エフタの登場と勝利」が主題です。彼は低い身分の出です。ギルアデの長老たちが、ドブに逃げて行ったごろつきのボスであるエフタに、首領になって欲しいと願ったのは、アモン人と対決して敗北が必至であることの故の苦肉の策だったのです。エフタはギルアデのミツパで全軍を整備し、アモン人に向かって行った。エフタは誓願を立て、動物のいけにえではなく、人をいけにえとしてささげることを誓った。まさかそれが自分の娘になるとは夢にも思っていなかった。神様はエフタの軽率な誓いに対して、最も厳しい報いを与えられた。エフタの娘の信仰はエフタにまさっていた。主はイサクの場合のようには父エフタを止められなかつたのです(創世記22:12)。

何かを差し出さなくては祝福には与れない。エフタばかりでなく多くの場合、人はそのように考えるのです。しかし神様がご自身の憐れみに頼ることだけを願っておられるのです。

◎ヨハネの福音書11章の主題は「死んだラザロを生かす」で、45～53節は「イエスを殺すたくらみ」です。ローマ帝国は、治安が守られる限り非支配国の宗教や政治に寛大な政策をとったが、一旦暴動でも起これば、たちまちローマ軍が介入したのです。ユダヤの宗教指導者たちは、イエス様が民衆の人気を集め、騒ぎを起こすことを恐れていたのです。彼らにとっては、自分たちの特権を守ることが判断の基準であったのです。その年の大祭司カヤパは、会議の議長役を務めたのです。カヤパは人間的・政治的な判断と動機から「この際、自分たちの利益を守り、国民全体が滅びを免れるためにも、イエス様を殺してしまった方が良い」といったに過ぎないのです。しかし、福音書記者は、このカヤパのことばの内に、無意識の預言を見ているのです(51, 52)。

ラザロの復活の出来事は、ユダヤの宗教的指導者たちを、イエス殺害の最終決定に導く決定的要因となつたのです。この過越の祭こそ、カヤパの預言が成就して、イエス様が十字架につけられる「時」であったのです。

神様としてのイエス様の御力に直接向かい合っても、信じようとしない人がいた。これらの目撃者たちはただイエス様を拒絶しただけではなかつた。彼らはイエス様を殺すための計画を立てた。彼らは非情であり、自分が間違っていることを認めるよりも、神の子を拒絶したのです。彼らは神様の驚くべき御力をすぐに受け入れる代わりに「閉鎖」を好んだのです。私たちは心を開こうではないか。